

魔女伝説

女伝説

半村 良

中央公論社

魔女伝説

一〇〇〇円

昭和五十三年八月十日初版発行
昭和五十三年八月三十日三版発行

著者 半村 良

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一八七七
電話 五六一一五九二一
振替 東京二二三四
検印廃止

目次

妻は窓あかりのように	7
描きかけの夜空	27
謎は苔寺のあたりに	49
夜は真珠色に光って	70
絵の中の風も冷たく	90
冬の陽さしの中で	111
うすけむりの女	132
玉露のかおり	152
降りつもる雪	174
奥能登の波	196
残雪の町に	219

若草萌ゆる 239

皐月の海へ 262

海の上の風 285

涙は石鹼の泡に 306

緑つらなる 325

狙撃者は古墳のかげに 346

夜のぬくもり 367

よろこびの午後 389

静かな里へ 411

往き交う便り 432

妻は窓あかりのように 453

魔女伝説

妻は窓あかりのように

1

ふと思い出した。

蓼科高原たぐさのホテルの裏の林の中で、瑤子ゆうことはぐれてしまったことがあった。そこは遊歩道から少しはずれた所であり、美しい白樺林に見えたので行ってみたのだが、奥へ進むに従って樹影が濃くなり、深い森になってしまふのだった。

あれは結婚した次の年の夏だった……。邦彦はそう思い、我に返った。自社製品である淡いブルーのスチール・デスクの上にレポート用紙が置いてあり、その右隅へ無意識にボールペンを当てて動かしていたのである。レポート用紙の上のほうには、会議のはじめ頃に書いた文字が幾つか並んでいる。

その部屋には、主として会議室用に開発されたRB90と言うタイプのデスクが二つ並べてあり、それを囲んで八人の部課長が、かなりゆったりとした間隔で坐っていた。

いま発言しているのは営業第二課の課長で、前期の支社や営業所の売上実績を分析し、各地の地方差を説明していた。そのとなりにいる営業部長が、しきりに頷いているが、邦彦はすでにその説明を聞いてしまっていた。

ボールペンの先に付着した僅かなインクのかたまりを掃除するようなつもりで、漠然とレポーター用紙の隅に線を引いていたのだが、いつの間にかその線から蓼科のホテルを連想していたのである。

ホテルは小さな人工湖のそばにあった。対岸へまわって眺めると、静かな湖面の向こうに白い建物があり、その背後に緑濃い山々が重なり合っていた。瑤子とはぐれた林は、奥へ進むと八子ガ峰の南斜面になるのだ。ほんのちよつと樹のかげに入っただけだろうと思っていたが、白い袖なしのワンピースを着た瑤子の姿はいっこうに現われず、五分もすると邦彦はたまりかねて探しはじめたのだった。

二十分、いや、四十分ほども探し続けた。子供じゃあるまいし……。はじめはそんな風に感じて腹立たしかったが、そのうち不安になって来て、瑤子、瑤子、と大声で呼び歩いた。

瑤子は邦彦が思ったよりずっと奥のほうへ入り込んでいた。そのあたりは下生えの雑草がからみ合うように茂っていて、うす暗い感じであった。

白いものがちらりと動いたのを見た瞬間、

「瑤子」

と邦彦は叱るように言った。瑤子は太い杉の木の幹に手を当て、梢を見あげていた。邦彦はそ

の時のほっとした気分を思い出し、同時に回想を打ち切った。さっきから続いていた説明がおわったからである。

会議の雰囲気は急になごやかになり、雑談のようになった。月例の各部合同会議で、企画課長である邦彦は、一番はじめに高級品開発の状況を報告してしまっていた。

「野川君」

総務部長が邦彦に笑顔を向けて言った。

「は……」

「今日あたりデートじゃないのか」
するとみんな一斉に邦彦を見た。

「いいえ、まだです」

調査課の課長が笑いながら言った。三、四人が声をあげて笑う。

「いいえまだです、はよかったな」

総務部長がニヤニヤしながら言った。

「野川君の奥さんのマネージャーのようだ」

「何しろ注目の的ですからね」

調査課の課長は弁解するようにそう言い、

「そうそう。この間、うちの課の若いのが、野川さんはいずれあの女性と結婚するんでしゅう、と訊くんですよ」

と、おどけた顔をして見せた。

「そうかも知れんな。まだ若いし、美人だし、人妻には見えんよ」

「それが半月に一度、必ず下の喫茶店へ現われて野川君を待っている……カフェ・オーレを注文して彼と十分ほどお喋りをして、それからいずくともなく……」

「おいおい、飲物まで知っているのか」

総務部長が呆れたように言った。

「みんな知っていますよ。若い女の子たちは、今度はどんなおしやれをして来るか、当てっこをしている位です」

すると営業部長が、

「とにかくこれはただごとではないのだ」

と深刻ぶって言った。会議室の中に笑い声が溢れた。

「結婚してもう三年だろう」

そう訊かれて邦彦は照れ臭そうに頷いた。

「ええ」

「どうしたらそういつまでも新婚気分でいられるんだか教えてもらいたいもんだ。俺なんか三年目にはもう、ろくに口もきかなかったぞ」

「それでいて五年目には三人の子持になっていやがった」

「それとこれとは別ですよ」

男同士の雑談は、いつもそんな調子でおわって行く。

一人が腕時計を見ると、それが合図だったかのように、みんなメモや書類を揃えはじめ、「それでは今日はこれまで」

と言う常務の西本の声と同時に、次々と立ちあがってドアへ向かった。

外はもう薄暗くなりはじめ、廊下へ出ると、少し寒いような感じだった。

2

邦彦は東日機材の企画課長である。東日機材は事務機の総合メーカーで、正しくは東日機材工業と言い、世間ではヘトーキという商標で知られている。スチール製のデスクや椅子から、各種のキャビネット、ロッカー、複写機、タイム・レコーダーなど、オフィスに必要な物で取扱わないのはコンピューターだけと言っているほどであった。

その業界が本格的に発展しはじめてからまだ日が浅く、従って社員の平均年齢も他業種からくらべるとかなり低い。しかし東日機材は業界のトップに位し、二十代で課長の椅子に坐ったのは邦彦がはじめてであった。

邦彦は自分のデスクに戻ると、会議室から持ち帰ったレポート用紙をちらりと眺め、蓼科の夏を連想させたいはずら書きのある一枚を破り取ると、そばの屑籠へ丸めて捨てた。

商売柄、オフィスは整然としている。そのオフィス自体がショー・ルームの役を果すからであ

る。デスクやキャビネットなどの並べ方も念入りで、書類を積みあげたデスクなど一つも見当たらなかった。

もう退社時間を過ぎていて、誰も残っていない。邦彦は抽斗^{ひまだし}へボールペンとレポート用紙をしまうと、肘つきの回転椅子をデスクの下へ押し込み、壁際のロッカーへ行った。そのロッカーは明るいクリーム色に塗られていた。殺風景で冷たい色ばかりのオフィスを少しでも明るい感じに変えるため、二年ほど前に邦彦の提案で量産化された製品である。

その企画は図に当たった。頭の古い経営者たちにも、その程度の色彩であれば大した変化には感じられなかったのだ。クリーム色のロッカーはいたるところのオフィスを姿を現わし、大げさに言えばオフィス向け収納家具の色彩革命をもたらしたのだった。

邦彦はそれを充分に読み切っていた。はじめはクリーム色で穏やかにオフィスへ色彩を持ち込み、それに成功したら、あとはもっと強い色へエスカレートして行く計画であった。

工場などは更衣室が独立している。そういう所では従来の物堅い一方で冷たい感じのロッカーを選ぶ必要など、はじめからなかったのである。ワイン・レッドやコバルト・ブルーのロッカーが発売されると、新設の工場などは在来型の薄暗い感じのロッカーには見向きもしなくなった。ことに女子の従業員を主体とする工場では、こんな色をと特別に指定して来るほどである。

オフィスの色彩革命、などと業界誌がはやしたてたりする中で、邦彦は社内における立場をため、出世コースを順調に走りだしていたのである。

邦彦はそのきつかけを作ってくれたクリーム色のロッカーから、カシミヤのコートを出して着

ると、壁のスイッチに触れて灯りを消し、廊下へ出た。

「どうだ、一杯やらんかね」

トレンチ・コートを着た常務の西本が、エレベーターの前で声をかけた。

「今日は勘弁してください」

邦彦は笑いながら言った。

「そうか」

西本も笑っていた。

「あの奥さんに恨まれるようなことはしたくない」

エレベーターのドアがあいて、二人は中へ入った。

「いつだったかな、君を引っ張りまわして午前さまにさせたのは」

「去年の暮ですよ」

「そうそう。翌朝目がさめてから気になってなあ。あの奥さんが一人でずっと外の物音に耳を澄ましてるところを想像してしまっただんだ。君の靴音が聞こえるのを待って……。これはいかんことをしてしまっただと、あわてて電話器にとびついたよ」

「家内が笑っていました。あの時の常務の電話はしどろもどろで、まるで浮気をして自分の奥さんにあやまっているようだったって」

ドアがあく。一階のロビーには冷たい風が吹いていた。

「この伴せ者め」

西本はエレベーターから出るとき、邦彦の肩を叩いて言った。

「焼鳥の話聞いたぞ」

「ああ、あれですか」

邦彦は右手を首筋に当てた。

「はずみでああいふことになったのです」

「君は奥さんに感謝するべきだな」

西本は真面目な声になって言った。自動ドアがあいて、外の北風がもろに吹きつけて来た。

社内の評判になっている通り、瑠子は半月に一度必ず丸の内へ出て来て、邦彦と一緒に外で夕食をするのだ。食事だけでなく、映画や芝居を見ることがあるし、買物をすることもある。二人は恋人同士のように夜の町を楽しむのだった。

だが、それが恒例化すると、ときどき邦彦の部下が割り込んで来るようになった。夏に一度、ビルの屋上で生ビールを二、三人に奢ったのがきっかけで、その次瑠子が現われると、

「奥さん、今日は僕たちが接待しますよ」

などと言うことになる。この前は六本木のサパー・クラブからはじまって、彼らの馴染の店を何軒か梯子した揚句に、神田のガード下の薄汚れたホルモン焼屋にまで連れて行かれてしまったのである。

それが翌日すぐ社内の話題になって、さばけているとか、ホルモン焼の食べかたが慣れていたとか……。優雅な感じの瑠子がそんな店で楽しげにしたのが意外だったようで、彼女の人気はこ